

2017年度 鬼頭ゼミ (演習 2)

「恋愛離れの要因の検討」

14SG1169 谷口陽

# 目 次

目次	i
I 序論	
1. はじめに	1
2. 恋愛とは何か	1
2-1. 恋愛の歴史	2
2-2. 現代の若者の恋愛観	5
2-3. 恋愛観の男女差	5
3. 若者の異性交際の現状	6
4. 草食系男子の登場	8
5. 恋愛離れしている若者の分類	10
6. 恋愛離れに関連する要因	13
6-1. 恋愛離れと社会的閉塞感	13
6-2. 恋愛離れと自我発達	15
6-3. 恋愛離れと消費行動	16
7. 先行研究における課題と本研究の目的	17
8. リサーチクエスション	17
II 方法	
1. 参加者	18
2. 手続き	18
3. 測定変数	18
III 結果	
1. 多次元自我同一性尺度の信頼性分析	20
2. 時間的展望尺度の信頼性分析	21
3. 恋人の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析	21

4. 恋人がない人の恋愛意欲の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析  
..... 22

IV 考察

1. 本研究の目的と結果のまとめ..... 24  
2. 本研究の結果と先行研究の関連..... 26  
3. 本研究の意義..... 27  
4. 本研究の問題点・課題..... 28  
5. 今後の検討課題..... 28

参考文献..... 29

付録..... 31

## I. 序論

### 1. はじめに

「恋愛」という言葉は私たちが生活しているなかでよく耳にする言葉である。恋愛ドラマ、恋愛小説、恋バナ、恋愛占い、恋愛結婚などの言葉が存在し、身近なテーマであると同時に現代の日本人の中には、「恋愛」を、結婚をして子孫を繁栄させるためのプロセスであると考え重要視している人も少なくないだろう。しかし、近頃「恋愛離れ」という言葉をよく耳にするようになった。実際、厚生労働省が日本・韓国・アメリカ・フランス・スウェーデンの5か国における20歳から49歳までの未婚の男女を対象に調査を行った厚生労働白書の平成25年版の報告では、現在恋人もしくは婚約者がいると答えた日本人の割合は24.6%であり、5か国中最低であった(表1参照)。また、5年前の割合と比べても割合が減少した国は日本とスウェーデンのみであり、さらにスウェーデンは3.7%の減少に対して日本は7.5%も減少している。

【表1】恋人・婚約者がいると回答した人の割合

	2005年	2010年	増減
日本	32.1%	24.6%	-7.5%
韓国	37.4%	40.8%	+3.4%
アメリカ	37.2%	40.0%	+2.8%
フランス	17.4%	28.8%	+11.4%
スウェーデン	30.6%	26.9%	-3.7%

(平成25年版厚生労働白書参照)

この「恋愛離れ」には様々な原因が存在すると考えられ、これまで先行研究では「恋愛離れ」とその原因と考えられる要因との関連に関する研究が多数行われてきた。本研究では、先行研究で「恋愛離れ」と関連があることが示された要因の中で、どの要因が「恋愛離れ」に一番影響を与えているかを明らかにし、考察することを目的としている。

### 2. 恋愛とは何か

本研究で「恋愛離れ」を研究するにあたり、そもそも「恋愛」とは何なのか、現在の若者は恋愛をどのように考えているのかを知る必要がある。恋愛は昔から存在するものであり、歴史がある。人々にとってずっと同じように捉えられてきた訳ではなく、紆余曲折を経て現代の人々が考える「恋愛」が形成された。まずは、「恋愛」について整理していきたい。

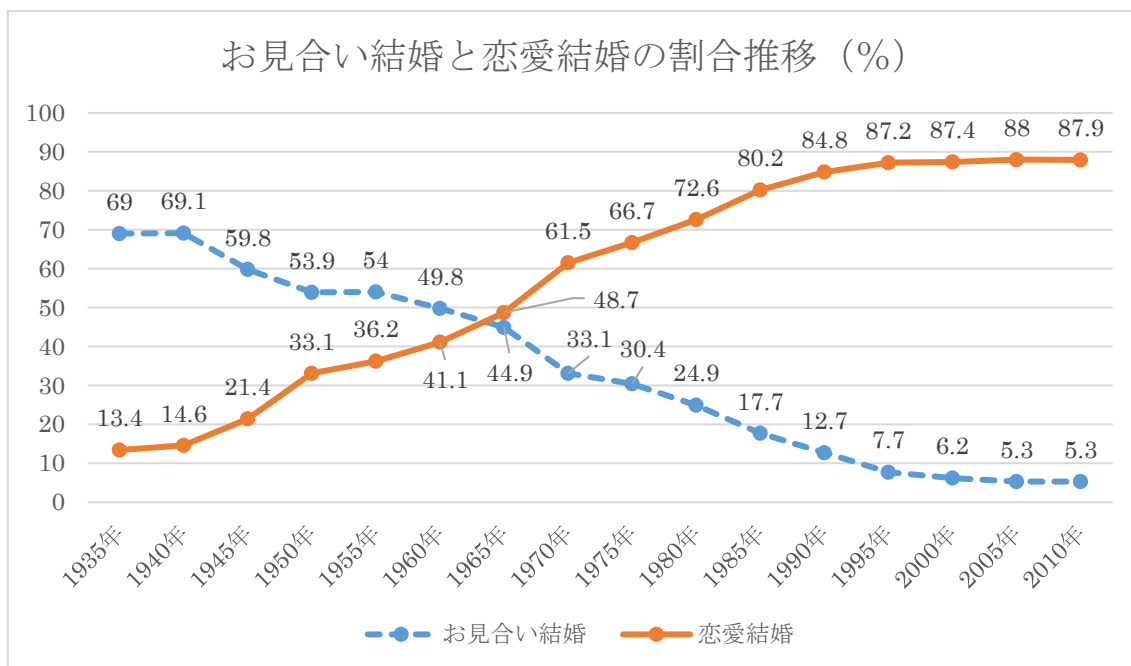
## 2-1. 恋愛の歴史

現代では「恋愛結婚」という言葉が存在しているが、かつて「恋愛」と「結婚」は相容れないものであり、恋愛結婚が生まれ、主流になったのは近代に入ってからのことだ。大越（2001）は、近代以前では『恋愛』、『性愛』、『結婚』は分離したものであった。（大越 2001:108）と主張している。では、近代以前の社会で恋愛とはどのようなものであったのかというと「近代以前の『恋愛』の形として、騎士道恋愛や宮廷恋愛などがあげられるが、それらの共通した特徴は『結婚の外でなされた』ことである」（谷本・渡邊 2016:56）、「当時愛と無縁な政略結婚が当然視されており、恋愛はあくまで婚姻外で行われるものであった。」（大越 2001:108）という。つまり、近代以前の社会では「恋愛」と「結婚」は全く別で考えられており、今のように好きになった人と結婚するという事は夢のような話であった。結婚の外で恋愛をすることが公になっていたため、今日本で話題となっている不倫という不義も認められる社会であったという。日本でもかつて結婚は家と家のつながりであると考えられていたので、今のように個人と個人のつながりを重視した恋愛結婚という概念はなかった。

近代以前の社会では全く今とは違う考え方をされていた「恋愛」は、どのようにして今の「恋愛」に近づいていったのだろうか。それまでの恋愛の考え方を大きく変えたのが「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」である。谷本・渡邊（2016）によると、ロマンティック・ラブ・イデオロギーは高度経済成長期以降に日本に実体的に普及したという。ロマンティック・ラブ・イデオロギーとは、「もともとは結婚と対立する恋愛を、逆に結婚と強く結びつけ、結婚相手に抱く感情こそが「恋愛」なのだ」と規定する」（谷本・渡邊 2016:57）というものであるという。つまり、結婚する相手との関係が本当の恋愛であるとして、逆に結婚相手以外との関係は虚偽の恋愛であると考えられるものである。恋愛の先に結婚が存在するという「恋愛・性・結婚の三位一体」の構図はこの頃に誕生した。実際、出生動向基本調査の結果を見てみると 1960 年代後半にお見合い結婚と恋愛結婚の割合が逆転していることが分

かる(図1参照)。ロマンティック・ラブ・イデオロギーの登場によって、「恋愛の『正当性』が、結婚につながるかどうかで審判される」(谷本・渡邊 2016:57)ようになった。

【図1】お見合い結婚と恋愛結婚の割合推移



(第15回出生動向基本調査参照)

しかし、この「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」も21世紀に入ってから弱体化し、変容を遂げたことが谷本・渡邊(2016)の研究で明らかになった。谷本・渡邊(2016)は、目に見えないロマンティック・ラブ・イデオロギーの変容を可視化するために雑誌分析を行った。その結果、「70年代には、ロマンティック・ラブ・イデオロギーと合致して、恋愛の中に非常に重要な要素として結婚が描かれていた。ところが、90年代以降、少なくとも『恋愛』の範疇から『結婚』が失われていくことが分かる」(谷本・渡邊 2016: 59)と示された。つまり、90年代以降、恋愛は必ずしも結婚に結び付かなくてよいものとなった。70年代の雑誌記事では、結婚にいたらない恋愛は真剣ではないなどと批判的に表現されていたものが、90年代以降は少なくなっていたようだ。だからといって、90年代以降に再び近代以前の「恋愛」と「結婚」を別物と考え、不義を公に認める社会に戻った訳ではなく、もっと複雑な考え方にロマンティック・ラブ・イデオロギーは変容したという。谷本・渡邊(2016)は「恋人と別れた理由」を自由記述で調査し、機械的に頻出語をカウントした結果、1位が

「相手」、2位「性格」、3位「不一致」であった。つまり、相手との性格の不一致が恋人との別れの理由に多かったという。そしてさらに谷本・渡邊（2016）は、湯沢（2014）が行った離婚理由の調査によって判明した、近年「性格が合わない」という離婚理由が増加しているという点に着目し、恋愛の別れと離婚理由が同じになってきていると指摘した。そして、この事態を「結婚が『恋愛と同じような関係性』として認識されている」（谷本・渡邊 2016: 61）として、『恋愛は結婚につながらなくてもいい』というイデオロギーは広まっていると考えられる。それにも関わらず『結婚にも恋愛のような関係性が求められる』ことになる」（谷本・渡邊 2016: 61）と、現在普及しているイデオロギーについて主張した。ロマンティック・ラブ・イデオロギーにおいて、恋愛の正当性の判断は結婚によって行われていたのに対して、現在普及しているイデオロギーは、恋愛感情の有無によって結婚の正当性が判断されるということである（表2参照）。そして谷本・渡邊（2016）はこのイデオロギーを「ロマンティック・マリッジ・イデオロギー」と名付けた。谷本・渡邊（2016）は、ロマンティック・ラブ・イデオロギーにおいて恋愛は「結婚を義務付けられた道」であり、ロマンティック・マリッジ・イデオロギーにおいて恋愛は「選択の機会」とであると表現している。ロマンティック・マリッジ・イデオロギーにおける恋愛は結婚をゴールとしていない（＝結婚に結び付かなくてよい）ので自由度が高いといえる。選択機会が増えたことから「複数の機会から選択しなければならないので、結婚を先送りする可能性が高い」（谷本・渡邊 2016: 67）と指摘されており、ロマンティック・マリッジ・イデオロギーの普及は晩婚化の要因になっているとも考えられる。また、谷本・渡邊（2016）は自由になって機会が増加したことは、先送りにする気持ちを生むだけでなく、無力感を生み、恋愛から撤退する人が増えるということを指摘している。

【表2】各イデオロギーの恋愛の捉え方

ロマンティック・ラブ・イデオロギー	ロマンティック・マリッジ・イデオロギー
恋愛は結婚をゴールとするもの	恋愛は必ずしも結婚に結び付かなくてよい
結婚が恋愛の正当性を判断	恋愛が結婚の正当性を判断
恋愛は結婚を義務付けるもの	恋愛は結婚相手の選択機会

（谷本・渡邊〔2016〕参照）

## 2-2. 現代の若者の恋愛観

ここまで恋愛の歴史をみてきたが、ここからは現代の若者の恋愛観に焦点を当て、もっと掘り下げてみていきたい。大森（2014）は若者の恋愛観を分析するために20歳代の大学生と社会人の異性愛者を対象としてフォーカス・グループディスカッションと補足的なインタビューを行った。女子学生・男子学生・女性社会人・男性社会人の4つのグループに分けてディスカッションを行い、それぞれが恋愛をどのように捉えているのかを分析するために調査対象者達の発言の中の「恋」、「恋愛」、「結婚」という3つの言葉に特に注目して研究を行った。

まず、4グループの共通認識として「恋愛」の始まりの段階に「告白」という儀礼的な行為があり、それを経て「付き合う」という契約関係が存在することが分かった。「仮に、告白を経ずに親密な関係が成立していたとしても、『付き合っている』のか否かを確認する会話は必ず必要となり、それにより「付き合う」という契約的了解が得られなければならないと語られた。」（大森 2014: 114）とあるように、現代の若者たちは恋愛において「告白」という行為を以て2人の関係が始まるため、「告白」という行為は恋愛にとって欠かせないことが分かる。また、「付き合う」という契約には性交渉を了承するという意味が込められているという認識が共通してみられた。

### 2-3. 恋愛観の男女差

大森（2014）の研究では、さらに「恋愛」に対する考え方について男女差がみられた。女性は結婚に結び付くような相手との関係を「本当の恋愛」とし、そうでない相手との関係は「ただの恋」とし、恋を恋愛と差別化して恋愛よりも劣ったものとして考えていることが分かった。この考え方は、谷本・渡邊（2016）のロマンティック・マリッジ・イデオロギーの考え方に合致しているといえる。社会人女性グループのディスカッションでは、年齢を気にしていつまでたっても「恋」ばかりしてられない、結婚に結び付く「恋愛」をしなくてはならないという意識が強くなることが分かった。この意識からも、女性は「恋」と「恋愛」をはっきりと区別しているということが分かる。同時に女性の結婚までの時間的制限意識もみることができる。

それに対して男性は、現在付き合っている相手との結婚が考えられなくても、別れを考へたり、結婚するのに相応しい相手を他に探したりすることはせず、とりあえず気持ちがあるうちは交際を続けて別れを先延ばしにしている傾向がみられた。社会人男性は「『恋愛』は



『人生の経験値を高める』ものという意味を持ち、その蓄積の先に結婚があると捉えている。」(大森 2014: 119)ということが分かった。

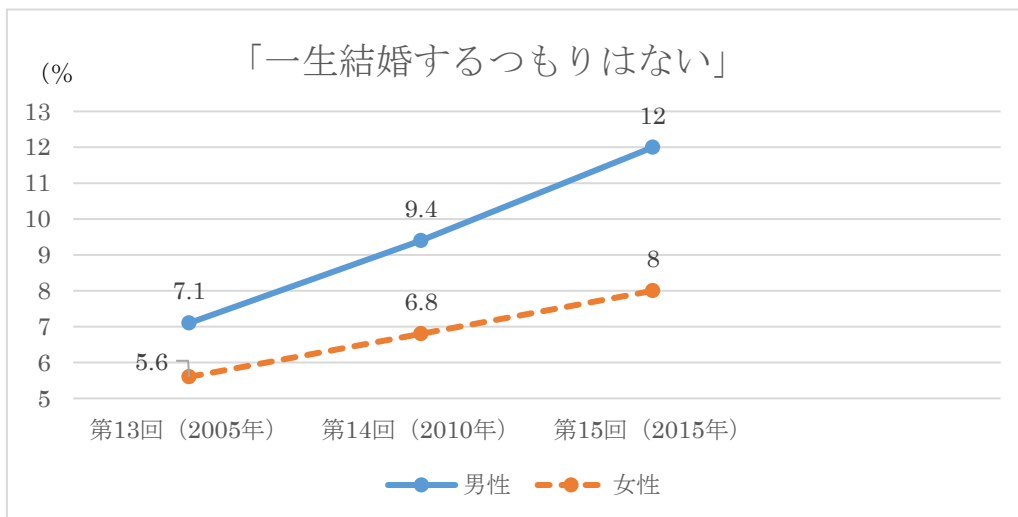
このディスカッションによって「女性にとっての『本当の恋愛』とは結婚に結びつく交際関係に限定されがちであるのに対して、男性にとっては『恋愛感情』が伴っている交際関係は全て『恋愛』とみなす傾向が確認できた。」(大森 2014: 123)と述べている。

### 3. 若者の異性交際の現状

ここまで「恋愛離れ」の要因の研究をするにあたって、そもそも「恋愛」とは何なのかと、いうことを整理するために、恋愛の歴史、恋愛観の時代による変遷、現代の若者の恋愛観を、先行研究をもとにみてきた。では、実際の異性交際の状況はどうなっているのだろうか。

全国の18歳以上50歳未満の独身の男女を対象とした政府の出生動向基本調査の結果によると「一生結婚するつもりはない」と答えた独身男女は第13回(2005年)の調査時に男性が7.1%、女性が5.6%だったが、第14回(2010年)調査時には男性が9.4%、女性が6.8%であり、第15回(2015年)調査時には男性が12.0%、女性が8.0%と増加傾向にある(図2参照)。

【図2】結婚するつもりのない独身男女の割合

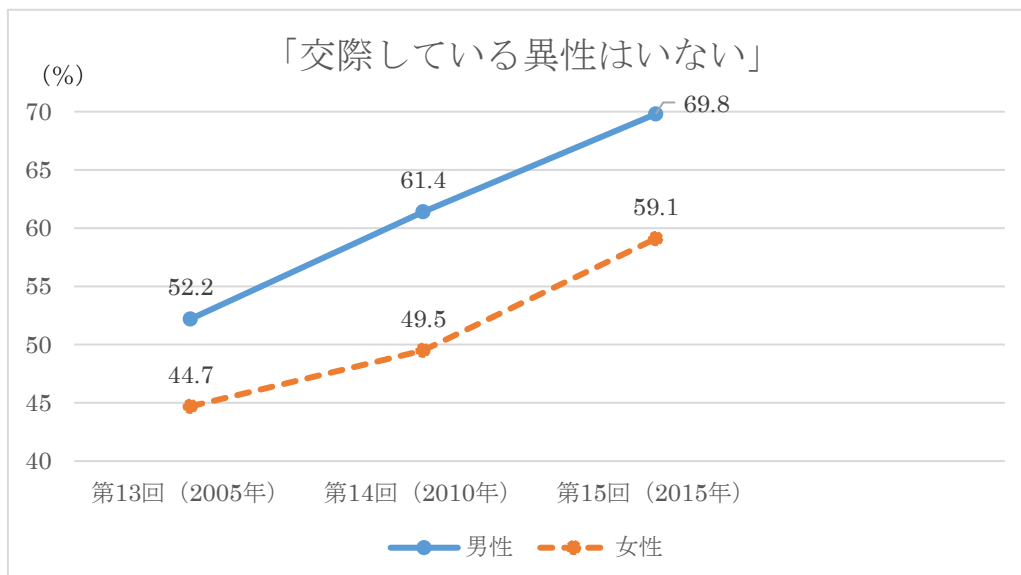


(第13回・第14回・第15回出生動向基本調査参照)

また、同調査で「交際している異性はいない」と答えた人の割合も第13回では男性が52.2%、女性が44.7%だったものが第14回で男性が61.4%、女性が49.5%、第15回で男

性が 69.8%、女性が 59.1%と増加していることがわかる（図 3 参照）。

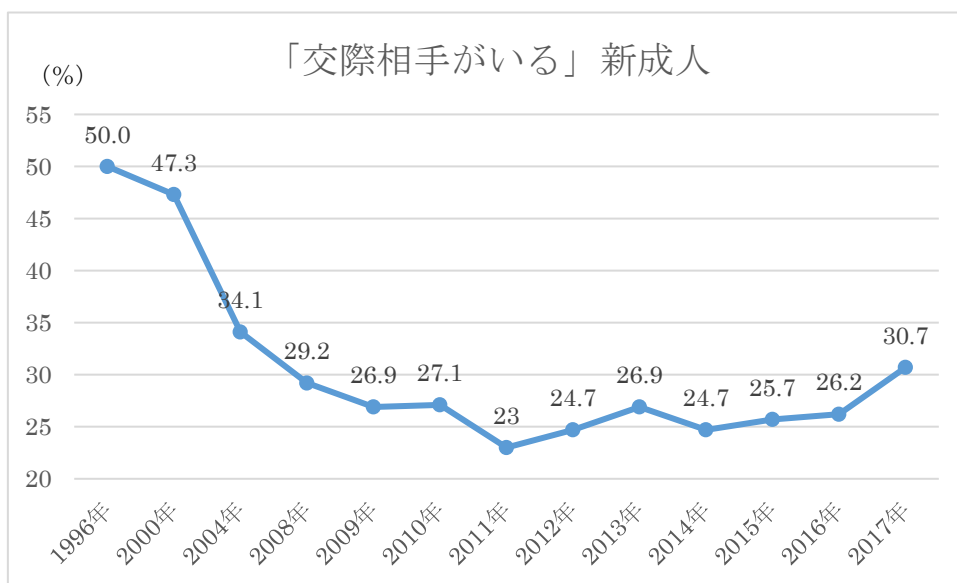
【図 3】 交際していない独身男女の割合



（第 13 回・第 14 回・第 15 回出生動向基本調査参照）

そして、楽天オーネットによる新成人を対象とした恋愛と結婚の意識調査でも、交際相手がいる新成人の割合が 1996 年は 50.0%だったが年々下降し、2011 年には過去最低記録の 23.0%になった。それ以降は微増して最新の 2017 年の調査では 30.7%となったが 1996 年の 50.0%と比べるとまだまだ恋愛離れの現状にあるといえる（図 4 参照）。

【図4】「交際相手がいる」新成人の割合



(楽天オーネット「新成人の恋愛・結婚意識」参照)

#### 4. 草食系男子の登場

これまで見てきたように、「恋愛離れ」は交際率の低下や結婚意図のない人の増加という形で、数字となってはっきりと表れている。「恋愛離れ」が進む一因として考えられているのが、今の時代誰しもが耳にしたことがあるであろう「草食系男子」と呼ばれる男性の増加である。

この言葉は2006年に「U35 男子マーケティング図鑑」に深澤真紀が「草食男子」というエッセイを発表したことで誕生した。提唱者であるこの深澤(2006)はエッセイで草食男子について、恋愛やセックスに縁がないわけではないが積極的ではない男子であると述べている。しかしこのエッセイが発表された2006年は草食男子という言葉は世間にあまり影響を与えることはなかった。しかし、2008年に女性誌「non-no」で草食男子の特集が組まれたことにより一気に社会に知れ渡っていった。さらに「草食男子」という言葉は2009年に「新語・流行語大賞」のトップ10入りを果たした(表3参照)。

【表 3】2009 年「新語・流行語大賞」トップ 10

政権交代	脱官僚
こども店長	派遣切り
事業仕分け	ファストファッション
新型インフルエンザ	ぼやき
草食男子	歴女（レキジョ）

(第 26 回ユーキャン「新語・流行語大賞」参照)

そして深澤とともに「草食系男子」という言葉に大きく関わったもう 1 人の人物が森岡正博だ。彼の著書である 2008 年に刊行された「草食系男子の恋愛学」が話題となり、これによってさらに草食系男子が話題になっていった。森岡はこの著書について「この本は、恋愛に奥手で、優しい心を持った若い男性たちに恋愛の手ほどきをするという内容で、2007 年に原稿執筆されたものである。」(森岡 2011: 16) と述べており、森岡の「草食系男子」とは、心が優しくなかなか女性に対して積極的になることができない男性のことを指している。深澤の「草食男子」はそこそこモテて恋愛経験はあるが積極的ではない男性を指し、森岡の「草食系男子」は心が優しすぎるがゆえに女性に積極的になれない男性を指しているため、わずかな意味の違いをもっている。このことから分かるように森岡 (2011) は「この本は、深澤や『non-no』の草食男子の提唱を受けて書かれたものではない。」(森岡 2011: 16) と述べて深澤の指している「草食男子」との違いを主張した。深澤の「草食男子」と森岡の「草食系男子」は、具体的な意味は違うものの男性の内面的なものを指しているという点では共通している。

しかし、多数のメディアで盛んに取り上げられていくうちに「草食系男子」の意味はどんどんと拡張していった。深澤や森岡が恋愛に積極的ではないという意味で使っていた言葉が、若い男性の外見を指す言葉としての意味を含んでゆき、女性のような美意識を持つ痩せ形でフェミニンなおしゃれをする若い男性という意味で広まっていくようになった。また、「『男の風上にもおけない軟弱な男』という蔑視の意味もこめられるようになった。」(森岡 2011: 17) という。今や意味が拡張し、様々な使い方をされ、様々な意味を持つようになった「草食系男子」という言葉であるが、本来は恋愛に積極的になることができない男性という意味を持っていたことをしっかりと知っておく必要がある。

森岡 (2011) は実際に草食系男子にインタビューを行ったところ、いくつかの共通した特

徴がみられたという。1つは、彼らは女性の外見に対してさほど関心が高くなく外見が恋愛感情の決め手にはならないということだ。2つ目は、いかにも「女性らしい」女性と向き合うと自分に「男らしさ」が求められているように感じるため、女性らしい女性が苦手であるということである。3つ目の特徴は、肉体的な接触よりも心のコミュニケーションを大切にしたいと考えていることであった。このように共通した特徴がみられた一方で、異性交際の経験に関しては経験豊富な人もいれば経験が少ない人もいて、結婚願望に関しても強い人と弱い人がいて多様性もみられたという。

また、森岡（2011）は「草食系男子」の登場は戦後日本の社会を象徴すると述べている。日本における男性の殺人検挙者数をみると20代男性の殺人数が年々減っている。戦後、戦争を放棄した日本は徴兵制がなくなり「男は兵士となり国のためにたくましく戦わなければならない」という規範がどんどんなくなっていく。ゆえに男性の凶暴性が減り、それが男性の草食化につながっていったのではないかと森岡は考え、「日本の若い男性の草食化は、日本の戦後66年間の平和の副産物だったのである。」（森岡 2011: 24）と主張している。

## 5. 恋愛離れしている若者の分類

「恋愛離れしている若者」と一言で表しても、実はそのなかには「恋愛をしたいと思っているができない人」と「そもそも恋愛に全く興味がない人」という2つのタイプに分類することができる。西村（2014）は、未婚者の恋愛行動を分析するために全国の25歳から39歳までの社会人未婚者1,500人を対象にアンケート調査を行い、恋愛状況を4つのカテゴリーに分類した。1つ目は既に交際相手もしくは婚約者がいるグループ、2つ目は恋人が欲しく、そのために何らかのアクションを起こしているグループ、3つ目は恋人が欲しいが何もしていないグループ、4つ目は恋人が欲しいと思っていないグループだ。西村（2014）はこれらのグループをそれぞれ「恋愛成就型」、「恋愛サーチ型」、「恋愛モラトリアム型」、「恋愛無関心型」と名付けた。恋愛をしていない人が、このようにサーチ型・モラトリアム型・無関心型の3タイプに分けられるということから恋愛離れしている人に多様性があるということが分かる。西村の調査では、何のアクションも起こしていないモラトリアム型と、そもそも恋愛に関心のない無関心型の合計が、男女ともに全参加者の半数以上を占めていた。この2タイプの若者の増加は恋愛離れを加速させると考えられる。

高坂（2013）は恋愛離れと自我発達との関連を調べるにあたって大学生 1,532 人を対象にアンケート調査を行い、恋愛を不要と感じている理由を因子分析・クラスター分析したところ 6 因子・5 群が抽出された。第 1 因子は、恋愛による負担の回避（負担回避）だ。これは、恋人がいることによって生じる心理的・実生活の負担を避けたいという点で恋人を欲しいと思わないということの意味する因子であるという。第 2 因子は、恋愛に対する自信のなさ（自信なし）だ。これは異性交際の方法や自分自身の魅力に対して自信を持っていないことから恋人を欲しいと思わないという因子である。第 3 因子は、充実した生活（充実生活）だ。日常生活が友人との交際や自分のやりたいことで充実しているために恋人は必要ないと思う因子だ。第 4 因子は、恋愛の意義のわからなさ（意義不明）だ。恋愛することの価値や意義を見出せないがゆえに恋人を欲しいと思わない因子である。第 5 因子は、過去の恋愛ひきずり（ひきずり）だ。過去の恋愛のトラウマを現在もひきずっているために恋人を欲しいと思わない因子である。第 6 因子は、楽観的恋愛予期（楽観予期）だ。恋人は作ろうと思って作るものではなく、自然とできるものであるという考えから恋人を欲しいと思わない因子である（表 4 参照）。

【表 4】恋愛を不要と感じている理由に関する因子の分類

	因子名	内容
第 1 因子	負担回避	恋愛による負担の回避（束縛や交際費の負担から逃れる）
第 2 因子	自信なし	恋愛に対する自信のなさ（自分に魅力がない）
第 3 因子	充実生活	充実した現実生活（他にやりたいことがある、友人の存在）
第 4 因子	意義不明	恋愛の意義のわからなさ（恋愛の価値がわからない）
第 5 因子	ひきずり	過去の恋愛の引きずり（過去の交際経験のトラウマや未練）
第 6 因子	楽観予期	楽観的恋愛予期（恋人はそのうちできると楽観視）

（高坂〔2013〕参照）

さらに、これらの因子をもとに、参加者に対してクラスター分析を行ったところ、参加者は 5 つの群に分類された。第 1 クラスターは、ひきずりと楽観予期以外の全ての因子が高得点で多くの理由を挙げて、恋人を欲しいと強く思っていない「恋愛拒否群」である。第 2 クラスターは、自信なしが高得点の「自信なし群」だ。第 3 クラスターは、充実生活と楽観予期が高得点であり日々の生活が充実していて恋人もいずれできると思っている「楽

観予期群」だ。第4クラスターは、ひきずり得点が高い「ひきずり群」であり、第5クラスターは、ひきずり得点以外全て低得点であり、特別な理由はないがなんとなく恋人が欲しいと思わない「理由なし群」だ（表5参照）。

【表5】クラスターの分類

	クラスター	男性	女性
第1クラスター	恋愛拒否群（第1～4の因子が高得点）	24.6%	19.4%
第2クラスター	自信なし群（第2因子が高得点）	19.3%	32.8%
第3クラスター	楽観予期群（第3・第6因子が高得点）	30.7%	25.0%
第4クラスター	ひきずり群（第5因子が高得点）	18.4%	13.9%
第5クラスター	理由なし群（第5因子以外全て低得点）	7.0%	8.9%

（高坂〔2013〕参照）

また、西村（2014）はアンケート調査で恋人が欲しくないと答えた人にその理由を尋ねたところ、1位は「趣味や自分の時間が大切」（25%）、2位は「お金がないから」

（17%）、3位は「恋愛が面倒だから」（16%）という結果となった。男女別にみると男性の理由の1位は「お金がないから」（24%）であり、異性交際となると男性が経済的に大きな負担を被ることになり、その負担からの回避が恋人を欲しくないという思いにつながるものがうかがえる。一方、女性の理由を見ると男性の理由で1位であった「お金がないから」という理由はかなり少数で3位までに入っておらず、趣味や自分の時間が大切と答えた人が29%と多かった（表6参照）。

【表 6】 恋人が欲しくない理由

	男女計	男性	女性
1 位	趣味・自分の時間が大切 (136/545 人、25%)	お金がないから (78/322 人、24%)	趣味・自分の時間が大切 (64/223 人、29%)
2 位	お金がないから (93/545 人、17%)	趣味・自分の時間が大切 (72/322 人、22%)	恋愛が面倒だから (37/223 人、17%)
3 位	恋愛が面倒だから (86/545 人、16%)	恋愛が面倒だから (49/322 人、15%)	その他 (24/223 人、11%)

(西村 [2014] 参照)

このように、恋愛離れしている人にも行動を起こしている人・行動はしていないが恋愛に興味のある人・一切無関心な人、と様々なタイプが存在し、恋人が不要と考えている理由もマイナスな理由から前向きな理由までじつに多様であるということが分かる。

## 6. 恋愛離れに関連する要因

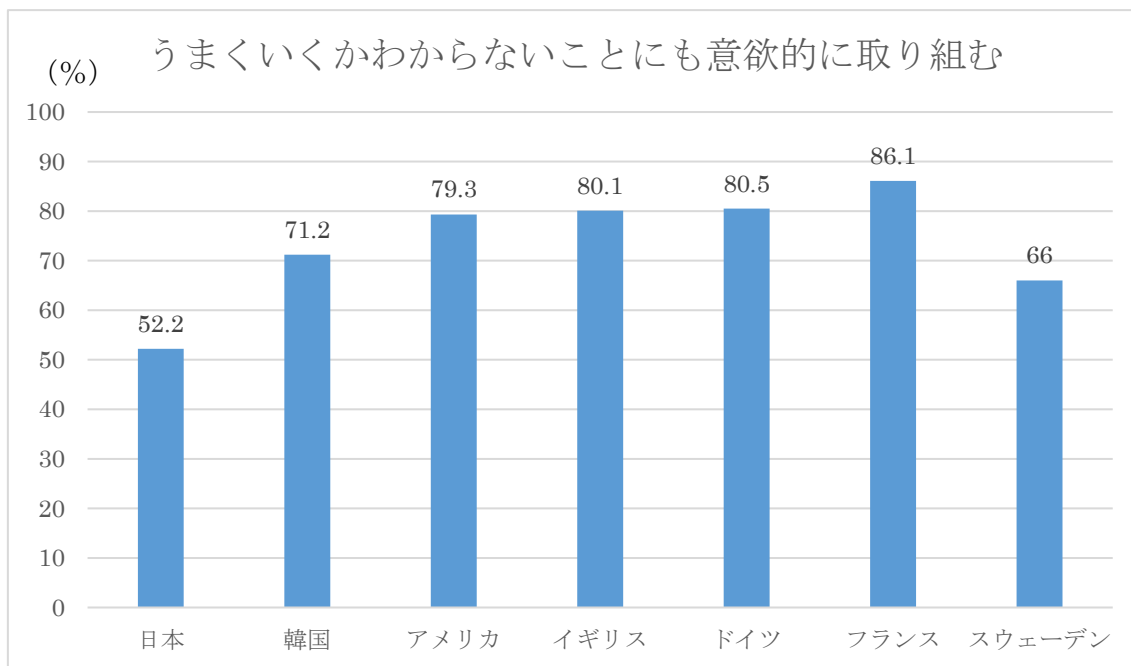
先行研究で、恋愛離れしている人に多様性がみられるということが示された。同時に、恋愛離れに影響を及ぼしていると考えられる要因も様々であり、これまで恋愛離れと様々な要因の関連を調べる研究が数多くされてきた。ここでは、それらの研究をいくつかみていきたい。

### 6-1. 恋愛離れと社会的閉塞感

現代の若者は恋愛に対する意欲のみならず様々な意欲が低下している。日本を含めた7か国の満13~29歳の若者を対象とした内閣府が行った若者の意識に関する調査によると、「分からないことに対して意欲的に取り組む」という質問に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた割合が7か国中一番低く、最近の心の状態を尋ねた項目で「やる気が出ない」と回答した若者が7か国中一番多いことが判明した(図5、6参照)。

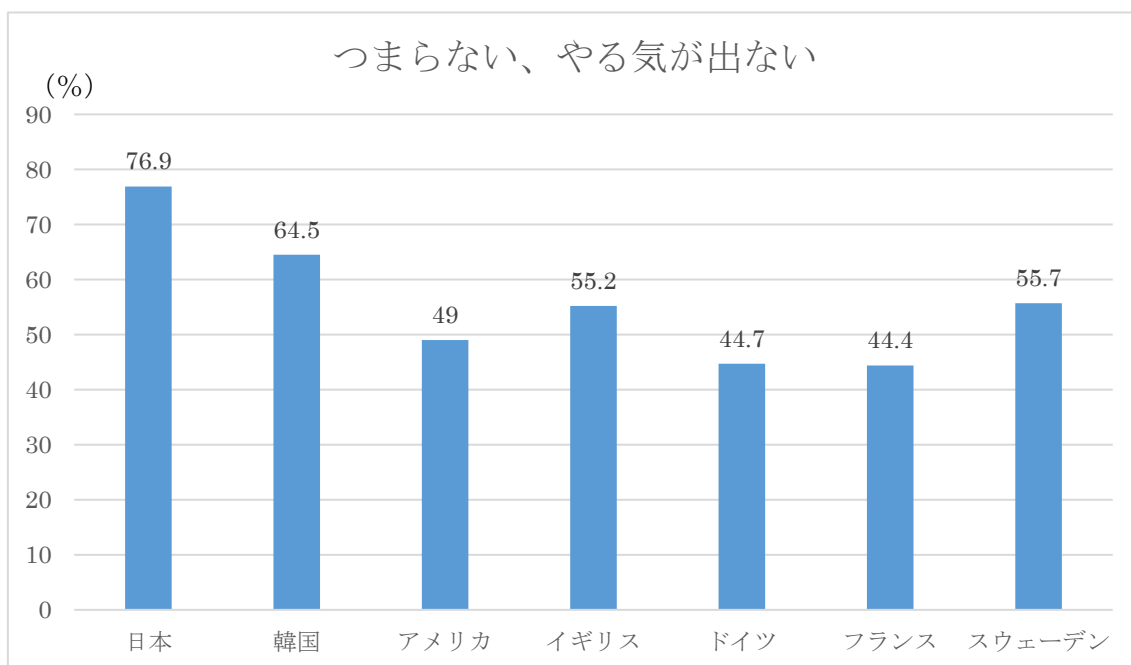


【図5】 7か国の若者の意欲



(平成 26 年版 子ども・若者白書参照)

【図6】



(平成 26 年版 子ども・若者白書参照)

こうした実態の中で、本研究のテーマである恋愛離れの他にも仕事離れ、消費離れ、政治離れなどの言葉が存在し、問題視されている。「こうした『消費離れ』の背景には、現在の国内経済の低迷やそれに伴う諸問題などの社会的閉塞感が若者に影響していることが考えられる」（南 2014: 208）と南は述べている。社会的閉塞感とは、将来に明るい希望が持てない状況のことを指す。南（2014）は、このような社会的閉塞感から現代の若者は「今」の幸せに目を向け、小さなことに喜びを求め、「これ以上の幸せ」を求めないようになったことが「恋愛離れ」にも影響を与えているのではないかと予測を立て、研究を行った。研究の結果、恋愛イメージがネガティブで、なおかつ恋愛に興味を持っていないと回答した人のうち、とくに男性は社会的閉塞感の影響を直接受けやすいという結果が得られた。つまり、社会的閉塞感を感じている男性が特に恋愛離れしているということだ。閉塞感を感じることによって他者との関係よりも自己との向き合いを尊重するようになり、自分の殻に閉じこもるようになって、それが「おたく」像に重なるところがみられると南（2014）は述べている。この研究で、恋愛離れしている人（とくに男性）ほど社会的閉塞感の影響を受け、それが「おたく」への助長になる可能性があることが示されている。

## 6-2. 恋愛離れと自我発達

高坂（2011）の研究では、恋人がいる若者を「恋愛群」、恋人はいないが欲しいと思っている若者を「恋愛希求群」、恋人がおらず欲しいとも思っていない若者を「恋愛不要群」と名付けて分類し、アイデンティティ形成の差を比較した。アイデンティティという言葉は E.H.エリクソンという心理学者から生まれた。アイデンティティという言葉は非常に多義な言葉であり、今もなお定義の検討が続いているが、辞書を引くと「自分は自分であって、他人とは違うこと。自己同一性。」（三省堂 ウェブディクショナリー参照）、「自己が環境や時間の変化にかかわらず、連続する同一のものであること。主体性。自己同一性。」（goo 国語辞書・デジタル大辞泉参照）と記載されており、日本語に訳すと「自己同一性」だ。また、小沢は「アイデンティティとは、何かと何かが同じであるという言葉の意味から、自分が自分であること、自分＝自分と捉えた」（小沢 2014: 97）と定義付けている。つまり、アイデンティティ発達とは自分が何者であるのかを自覚することである。高坂（2011）がアイデンティティ発達差を比較した結果、恋愛群や恋愛希求群と比較して恋愛不要群はアイデンティティの感覚が劣っているという結果がみられた。さらに高坂

(2013) では恋愛不要群を恋愛不要理由によってさらに分類し、恋愛不要群の中での自我発達（≡アイデンティティ発達）の差を研究した。その結果、恋愛拒否群と自信なし群は自我発達の程度が低いということが分かった。親密な対人関係に対する拒否の姿勢や自信のなさが自我発達を妨げているといえる。しかし、恋愛不要群の中でもひきずり群は自我発達の程度が高く、特に楽観予期群は自我発達の程度が非常に高いということが判明した。ひきずり群は過去に恋人がいた時点で自我発達が進んだためにこのような結果になったと考えることができる。また楽観予期群に関しては「楽観予期群は、基本的信頼感得点も高かった」（高坂 2013: 292）という結果から、基本的信頼感の高さが自我発達を促進させたと考えることができる。これらのことから、相手と親密な関係になることに抵抗がある・自信がない人はアイデンティティの感覚に劣りができるため、恋人のいない人はいる人と比べて自我発達の程度が低いということ、しかし恋人がいない人であっても理由を掘り下げて研究することによって自我発達が進んでいる人が存在するということが示された。

### 6-3. 恋愛離れと消費行動

渡辺（2010）は、大学生を対象に恋愛意識と行動に関する調査を1997年と2009年にを行い比較し、その中で消費行動に関しての調査も行った。最近の若者は「嫌消費」（購買意欲が低い状態）の傾向があると指摘されているが、それが実際に大学生にも当てはまっているのかどうかを明らかにする為にこの調査は実施された。

まず、大学生のアルバイト時間についての調査において「1997年の調査では、恋人がいる者の方がいない者よりも長時間のアルバイトをしていた。しかし恋人の有無にかかわらず、一般的に男子の方が女子よりもアルバイトをしており、その時間の長さは、恋人のいる男子>恋人のいない男子>恋人のいる女子>恋人のいない女子、の順であった」（渡辺 2010: 121）という結果となった。それが2009年の調査ではアルバイト時間の長さの性差は消失したという。具体的にいうと、男子は週に16時間以上バイトをする人が恋人の有無にかかわらず大幅に減少し、女子はバイトをしない人が減って週に16時間以上働く人が増えた。（特に恋人のいない女子で週に16時間以上働く人が増えた）。つまり、女子は長時間化して男子は短縮されたということだ。

そして、渡辺（2010）は小遣いの使途を調査し、恋人の有無で消費行動に差がみられるかどうかの調査も行った。その結果、恋人がいる人はいない人に比べて性別を問わず「交

際費」にかける割合が多いという結果が得られた。また、男女別に結果をみていくと、恋人のいる男子は趣味にかけるお金が少ないという特徴がみられた。これは恋人のいない男子にも恋人のいる女子にもみられない特徴である。

このような特徴がみられた原因は、渡辺（2010）によると、異性交際において男子の方が費用に関して負担が大きいためだと考えられるという。しかし、1997年の調査時には恋人のいる男子において小遣いの使途の第1位は「交際費」であったが2009年には第3位に下がった。代わりに「趣味」と「服飾費」の割合が上がっており、自分にかける金額の割合が多くなったことが判明した。他者との付き合いよりも自分に投資している人が増えているということが明らかになり、この結果は恋愛離れと大きく関連があるといえる。また、免許取得にかかる費用や車の購入にかける割合が1997年と比べて2009年は減少しており、若者が大きな支出を控える傾向がみられ、若者が「嫌消費」の傾向にあるという知見が支持される結果となった。また、「このような消費行動の変化が、男子におけるアルバイトの必要性を低下させ、アルバイト時間の減少の一因になったと考えられよう」（渡辺 2010: 125）と渡辺は述べている。女子においては、恋人の有無で比べても支出の差に男子ほど大きな差はみられなかったという。しかし、1997年の調査では恋人のいる女子の方が服飾費にかけるお金の割合が大きいという結果になっていたが、2009年には恋人のいない女子の方が服飾費にかけるお金の割合が大きくなっており「恋人がいると服飾費の支出が多くなるという傾向が、消失している。」（渡辺 2010: 125）という結果になった。

## 7. 先行研究における課題と本研究の目的

これまで挙げてきたように、恋愛離れが世間で指摘されて関心が高くなったことから、恋愛離れに関する研究も多くなった。恋愛離れと様々な要因との関連を検証した研究が多く存在するが、それぞれの研究では個別の要因しか扱っておらず、実際、どの要因が恋愛離れに一番強く影響しているのかは、明らかにされていない。本研究では、恋愛離れに一番影響を与えている要因を明らかにすることを目的とする。

## 8. リサーチクエスチョン

恋愛離れに一番影響を与えている要因は何なのだろうか。本研究では、特に、先行研究

で恋愛離れと関連の見られた、社会的閉塞感、アイデンティティ発達、消費行動に焦点を当て、このうち恋愛離れと最も強く関連している要因について検討を行う。

## II. 方法

### 1. 参加者

18歳、19歳、20代を中心とした133名（男性28名、女性105名）が質問紙に回答した。参加者の平均年齢は21.85歳（ $SD=1.19$ ）で、交際状況の内訳は既婚者2名、恋人がいる人が52名、恋人がいない人が79名（そのうち恋人を欲しいと思っている人が57名、恋人を欲しいと思っていない人が22名）であった。

### 2. 手続き

インターネット上のGoogle Formを用いて質問紙を作成し、URLをLINEやTwitterを利用して研究者の知人を中心に拡散して、任意の場所からインターネット上で回答してもらった。

### 3. 測定変数

#### 1) 交際状況

現在交際している相手がいるのか、もしくは婚約・結婚をしているのかについて1項目で尋ねた。また、現在交際相手がない回答者に関しては高坂（2011）に倣い交際意欲の有無で分けるために「恋人はいないが恋人が欲しいと思っている」と「恋人がおらず恋人が欲しいとも思わない」の2つの選択肢を設けた。

#### 2) 過去の交際経験

過去に何人と交際したことがあるのかを尋ねた。現在交際・婚約・結婚している人がいる場合には、現在のパートナーを含めた人数を回答してもらった。

### 3) アイデンティティ形成・自我発達

多次元自我同一性尺度【MEIS】(谷, 2001)を用いた。「自分がどうなりたいたいのかはっきりしている」等の項目を含み、「自己斉一性・連続性」、「対自的同一性」、「対他的同一性」、「心理社会的同一性」の4因子各5項目の計20項目(そのうち14項目が逆転項目)から成っている。「以下のそれぞれの項目が、普段のあなたの考えや気持ちにどの程度当てはまるのかについて、最も当てはまる数字を一つ選んでください。」という教示文を提示し、1=全く当てはまらない、2=当てはまらない、3=あまり当てはまらない、4=少し当てはまる、5=当てはまる、6=非常に当てはまる、の6件法で測定した。

### 4) 社会的閉塞感

時間的展望尺度(白井, 1994)を用いた。「私の将来には希望がもてる」等の項目を含み、「希望」、「目標指向性」、「充実感」、「過去受容」の4つの下位尺度、逆転項目を10項目含んだ計18項目から成っている。「以下のそれぞれの項目が、普段のあなたの考えや気持ちにどの程度当てはまるのかについて、最も当てはまる数字を一つ選んでください。」という教示文を提示し、1=全く当てはまらない、2=当てはまらない、3=あまり当てはまらない、4=少し当てはまる、5=当てはまる、6=非常に当てはまる、の6件法で測定した。

### 5) 消費行動

「以下のそれぞれの項目に1ヶ月あたりいくら使っているか1つ選んで回答してください。(正確に分からない場合、大体でかまいません。)」という教示文のもと、1ヶ月に何にどれくらいの金額をかけているかを尋ねた。項目は渡辺(2010)の研究に倣って、1.勉強用の本、2.娯楽用の本・雑誌、3.生活費・貯金、4.交際費、5.服飾費、6.趣味、7.通信機器の料金、の7項目を用いた。アンカーは～5,000円、5,001～10,000円、10,001～20,000円、20,001～30,000円、30,001～40,000円、40,001～50,000円、50,001円以上、の7件法に設定し回答してもらった。また、消費行動のなかでも自動車に関してより詳しく調査するために普通自動車免許の取得状況と現在利用できる車についても尋ねた。普通自動車免許の取得状況に関しては「あなたの普通自動車免許の取得状況について、当てはまるものを1つ選択してください。」という質問を設定し、1=免許を取得している、2=免許を現在取得中、3=免許を持っていない、というアンカーを使用した。現在利用できる車については「あな

たが現在利用できる車について、当てはまものを1つ選択してください。」という質問を設定し、1=自分専用の車がある、2=家族やルームメイトと兼用の車がある、3=利用できる車はない、というアンカーを使用した。

#### 6) Big Five、自尊感情尺度、The mate value scale

上記の変数の他に、参考として Big Five (小塩ら, 2012)、自尊感情尺度 (箕浦ら, 2013)、The mate value scale (Edlund & Sagarin, 2014) の尺度を用いた。

#### 7) デモグラフィック項目

参加者の性別、年齢、居住形態、出身地に関するデモグラフィック項目を尋ねた。

### III. 結果

#### 1. 多次元自我同一性尺度の信頼性分析

アイデンティティ発達の程度を測るために使用した 20 項目が、先行研究で示された通り「自己斉一性・連続性」、「対自的同一性」、「対他的同一性」、「心理社会的同一性」の 4 因子に分かれるかを検証するために、主因子法、プロマックス法による斜交回転を用いた因子分析を行った。なお、この 20 項目のうち 14 項目は逆転項目であったため、逆転処理を行ったうえで因子分析をした。その結果、4 因子を抽出したものの、先行研究と同様の項目を含む 4 因子にはならなかった。そこで、先行研究に倣って因子ごとに項目を分けて信頼性分析を行ったところ「心理社会的同一性因子」( $\alpha = .225$ )を除いて十分な信頼性が得られた(表 7 参照)。しかし、「心理社会的同一性因子」から「17.現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う」の項目を削除することで妥当な信頼性( $\alpha = .718$ )が得られたため、その項目を削除した尺度を用いて分析を行った。

【表 7】多次元自我同一性尺度の信頼性分析

因子	自己斉一性・ 連続性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的 同一性
----	---------------	--------	--------	--------------

$\alpha$ 係数	.855	.819	.800	.718
-------------	------	------	------	------

## 2. 時間的展望尺度の信頼性分析

社会的閉塞感の程度を測るために使用した 18 項目が、先行研究で示された通り「充実感」、「目標指向性」、「過去受容」、「希望」の 4 因子に分かれるかを検証するために、主因子法、プロマックス法による斜交回転を用いた因子分析を行った。なお、この 18 項目のうち 10 項目は逆転項目であったため、逆転処理を行ったうえで因子分析をした。その結果、4 因子を抽出したものの、先行研究と同様の項目を含む 4 因子にはならなかった。そこで、先行研究に倣って因子ごとに項目を分けて信頼性分析を行ったところ「過去受容因子」( $\alpha = .674$ )を除いて十分な信頼性が得られた(表 8 参照)。「過去受容因子」から「3. 私は過去の出来事にこだわっている」の項目を削除することで妥当な信頼性 ( $\alpha = .724$ ) が得られたため、その項目を削除した尺度を用いて分析を行った。

【表 8】時間的展望尺度の信頼性分析

因子	充実感	目標指向性	過去受容	希望
$\alpha$ 係数	.782	.798	.724	.802

## 3. 恋人の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析

「アイデンティティ発達」、「社会的閉塞感」、「消費行動」のうちどの要因が恋愛離れに影響を与えているかを検討するため、恋人の有無 (0=恋人無し、1=恋人・配偶者・婚約相手有り) を従属変数、多次元自我同一性尺度の「自己斉一性・連続性」因子、「対自的同一性」因子、「対他的同一性」因子、「心理社会的同一性」因子、時間的展望尺度の「充実感」因子、「目標指向性」因子、「過去受容」因子、「希望」因子、消費行動の「交際費」、「趣味への出費」を独立変数としてロジスティック回帰分析を行った。その結果、対自的同一性と趣味への出費が恋人の有無を有意に予測するということが示された(表 9 参照)。また、目標指向性と交際費に関しては有意に予測できないが、有意傾向であると示された。つまり、自分がどのような人物であるのかを自分で認識できている人、趣味への出費が多い人ほど恋人がいないと予測ができるということである。そして、将来について明確な目標を持っている人、交際費の出費が多い人ほど恋人がいる傾向があるということ



を示している。オッズ比に関して、少数倍の項目はそのままだと解釈が難しいため、正数倍に変換して解釈した。その結果、自分がどのような人物であるのかを自分で認識できている程度（対自的同一性得点）が6件法で測定したうちの1点上がると1.77倍恋人がいない確率が上がり、趣味への出費が7件法で測定したうちの1点上がると1.40倍恋人がいない確率が上がると予測できる、ということが示された。そして、将来について明確な目標を持っている程度（目標指向性得点）が6件法で測定したうちの1点上がると1.70倍恋人がいる確率が上がる傾向がある、交際費の出費が7件法で測定したうちの1点上がると1.32倍恋人がいる確率が上がる傾向がある、ということが示されている。

【表9】恋人の有無に関するロジスティック回帰分析の結果とオッズ比

変数名	非標準化係数	標準誤差	有意確率 ( <i>p</i> )	オッズ比
自己斉一性・ 連続性	0.077	0.211	.716	1.080
対自的同一性	-0.571	0.279	.040*	.565*
対他の同一性	0.279	0.269	.299	1.322
心理社会的 同一性	0.332	0.327	.309	1.394
充実感	-0.061	0.324	.852	.941
目標指向性	0.531	0.296	.072 <sup>+</sup>	1.701 <sup>+</sup>
過去受容	-0.257	0.210	.221	.774
希望	0.117	0.348	.737	1.124
交際費	0.275	0.148	.063 <sup>+</sup>	1.317 <sup>+</sup>
趣味への出費	-0.336	0.117	.004**	.715**
R <sup>2</sup>	.248**			

\*\**p* < .01, \**p* < .05, +*p* < .10

#### 4. 恋人がいない人の恋愛意欲の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析

先行研究で、恋人がいない人を「恋人はいないが欲しいと思っている」人と「恋人がおらず欲しいとも思っていない」人に分類できる（西村, 2014）ということが示されていたので、その分類に倣って上記と同様の分析を行った。恋人がいない人の恋愛への意欲の有

無（0＝恋人がおらず欲しいとも思わない、1＝恋人はいないが欲しいと思っている）を従属変数として、上記と同様の変数を独立変数としてロジスティック回帰分析を行った。その結果、対自的同一性と心理社会的同一性が、恋人がいない人の恋愛への意欲の有無を有意に予測するということが示された（表 10 参照）。また、有意に予測はできないが自己斉一性・連続性と交際費も有意傾向であることが示された。つまり、自分がどのような人物であるのかを自分で認識できている人ほど恋人を欲しいと思っていないと予測でき、自分が社会と適応して結び付いているという感覚がある人ほど恋人を欲しいと思っていると予測できることが示された。そして、自分が自分であるという一貫性を持ち続けられている感覚のある人ほど恋人を欲しいと思っていない傾向があり、交際費の出費が多い人ほど恋人が欲しいと思っている傾向があるということが示された。オッズ比に関して、少数倍の項目はそのままと解釈が難しいため、正数倍に変換して解釈した。その結果、自分がどのような人物であるのかを自分で認識できている程度（対自的同一性得点）が 6 件法で測定したうちの 1 点上がると 3.94 倍恋人を欲しいと思わない確率が上がり、自分が社会と適応して結び付いているという感覚（心理社会的同一性）が 6 件法で測定したうちの 1 点上がると 2.83 倍恋人を欲しいと思っている、ということが示された。そして、自分が自分であるという一貫性を持ち続けられている感覚（自己斉一性・連続性）が 6 件法で測定したうちの 1 点上がると 1.87 倍恋人を欲しいと思わない傾向がある、交際費の出費が 7 件法で測定したうちの 1 点上がると 1.43 倍恋人を欲しいと思う傾向がある、という結果が得られた。

【表10】恋人がない人の恋愛への意欲の有無に関するロジスティック回帰分析の結果とオッズ比

変数名	非標準化係数	標準誤差	有意確率 ( <i>p</i> )	オッズ比
自己斉一性・ 連続性	-0.626	0.346	.071 <sup>+</sup>	.535 <sup>+</sup>
対自的同一性	-1.369	0.374	<.001 <sup>**</sup>	.254 <sup>**</sup>
対他的同一性	0.633	0.426	.137	1.883
心理社会的 同一性	1.041	0.522	.046 <sup>*</sup>	2.832 <sup>*</sup>
充実感	-0.798	0.493	.106	.450
目標指向性	0.361	0.570	.526	1.435
過去受容	-0.048	0.288	.868	.953
希望	0.617	0.510	.226	1.854
交際費	0.355	0.214	.097 <sup>+</sup>	1.426 <sup>+</sup>
趣味への出費	-0.309	0.196	.115	.734
R <sup>2</sup>	.432 <sup>*</sup>			

\*\* *p* < .01, \* *p* < .05, + *p* < .10

#### IV. 考察

##### 1. 本研究の目的と結果のまとめ

本研究の目的は、先行研究において恋愛離れを予測する要因の中で、一番強い影響を与えている要因が何かを明らかにすることであった。本研究では、従属変数を恋人の有無にした分析と、恋人がない人の恋愛意欲の有無にした分析の2パターン行った。その結果、従属変数を恋人の有無にした分析では対自的同一性（自分がどんな人物であるのか認識できている感覚）が高く、趣味への出費が多い人ほど、恋人がない確率が高いことが示された。また、目標指向性（将来の目標が明確である感覚）が低く、交際費の出費が少ない人ほど、恋人がない傾向があると判明した。従属変数を恋人がない人の恋愛意欲の有無にした分析では、対自的同一性（自分がどんな人物であるのか認識できている感覚）が高く、心理

社会的同一性（社会の中での自分の立場が明確且つ自分が社会に適応できているという感覚）が低い人ほど、恋人を欲しいと思っていない確率が高いことが示された。また、自己斉一性・連続性（時間や場所を問わず一貫して自分を認識できている感覚）が高く、交際費の出費が少ない人ほど、恋人を欲しいと思っていない傾向があるという結果が得られた。この結果から、恋人の有無と恋愛意欲の有無の双方を有意に予測しているという結果が得られた。対自的同一性の高さが、恋愛離れに最も強い影響を与えているということが示された。また、恋愛意欲の有無に関する分析で、自己斉一性・連続性（時間や場所を問わず一貫して自分を認識できている感覚）が高い人ほど恋人を欲しいと思っていない傾向があるということが示されたことから、どんな時も自分がどんな人物であるのかをしっかりと認識できているアイデンティティが確立している人ほど恋愛離れをしている傾向があるといえる。交際費の出費の少なさに関しても、双方の分析で恋愛離れに影響を与えている傾向があるという結果が得られたため、比較的強い影響を与えているといえるだろう。また、恋人の有無に関する分析で、趣味への出費が多いほど恋人がいないという有意な結果が得られたにもかかわらず、恋人がいない人における恋愛意欲の有無の分析では有意な結果が得られなかったことから、恋人がいる人に比べて恋人のいない人は、恋愛意欲の有無にかかわらず趣味への出費が多いということが示された。そして、交際費への出費が多い人ほど恋人がいて、趣味への出費が多い人ほど恋人がいないという結果から、恋人がいない人は趣味にお金をかけているので交際費にお金を使っていないということが考えられる。また、恋人がいないから交際費が少なく、その分を趣味にあてているとも考えられる。そして、恋人はいないが恋人を欲しいと思っている人は、恋人を欲しいと思っていない人よりも交際費を費やしているという結果から、恋愛意欲のある人は出会いの場に積極的に足を運んでいるのではないということも推測できる。目標指向性（将来の目標が明確である感覚）が低い人ほど恋人がいないという結果から、恋人がいない人は未来に明確なビジョンがなく、毎日をなんとなく過ごしていると解釈できる。心理社会的同一性（社会の中での自分の立場が明確且つ自分が社会に適応できているという感覚）が低い人ほど、恋人がおらず欲しいと思ってもいないという結果から、恋人がおらず恋愛の意欲もないということに関して自分が少し社会の考え方から逸脱しているという感覚を持っていることが推測できる。

## 2. 本研究の結果と先行研究の関連

社会の中での自分の立ち位置を自覚し、自分が社会に適応しながら結び付いているという感覚が低い人（心理社会的同一性得点が低い人）ほど恋愛意欲が低いという結果は、高坂（2011）の結果と一貫していた。将来の目標が明確でなく、漠然としている人（目標指向性が低い人）ほど恋人がいないという結果も、南（2014）の結果と一貫していた。また、趣味への出費が多い人・交際費への出費が少ない人ほど恋人がいない、もしくは恋愛意欲が無い、という結果は渡辺（2010）と一貫していた。しかし、対自的同一性（自分がどのような人物であるのかを自分で認識できている感覚）と自己斉一性・連続性（時間や場所を問わず一貫して自分を認識できている感覚）に関しては、先行研究では高い人ほど恋人がいる、もしくは恋人を欲しいと思っている、という結果であったが、本研究では高い人ほど恋人がいない、もしくは恋人がおらず欲しいとも思っていない、という相反する結果が得られた。

先行研究と異なった結果が得られた原因が3点考えられる。1つは、調査対象の違いである。高坂（2011）の研究では、調査対象が大学生のみであったのに対して、本研究では社会人を含む18歳、19歳、20代の若者が対象であった。社会人と大学生は環境や意識に少なからず違いがあると考えられる。社会人になって、自分のすべき仕事や会社での立ち位置が明確になることによって、恋人の有無や恋愛意欲の有無は関係なく、自分がどのような人物であるのかを自分で認識できている感覚（対自的同一性）が高い人が多いのではないかと考えられる。そこで、社会人と大学生で結果に違いがみられるかの分析を試みたが、本研究では質問紙で年齢しか尋ねておらず、社会人と大学生で変数を作成して分析を行うことは不可能であった。代替策として、調査参加者の年齢を中央値分割し、高群と低群を表す変数を作成してロジスティック回帰分析を行ったが、高群と低群の両方で対自的同一性が高いほど恋人がいない、もしくは恋愛意欲が低いという、サンプル全体と一貫した結果が得られた。つまり、この結果に関して、年齢による差はみられないということである。しかし、この結果はあくまで年齢を2分割したものを変数としたので、社会人と大学生を分けて分析を行った場合、差がみられるかもしれない。

2つ目は、先行研究の調査時から少なくとも6年経過しているという点である。6年経過したことによって、若者のアイデンティティの感覚に変化が出ている可能性があるということだ。畑野（2010）の「とりわけ1990年代以降の社会状況の変化は非常に大きく、その変化は青年のアイデンティティ形成に大きく影響を与えていると考えられる。」（畑野2010:34）という主張や、木谷・岡本（2015）の、一元的であった若者のアイデンティティは2000年前後を境に多元的なものとなってきているという主張から、時系列的にみてアイ

アイデンティティ感覚は変化していくものであるということがいえる。今回も、先行研究が行われてから約 6 年経過しているため、若者のアイデンティティ感覚に何らかの変化があり、先行研究と相反する結果が出たのではないだろうか。

3 点目は、自我が発達しているからこそ独り身である、という成人愛着スタイルの拒絶型と一貫した考えだ。中尾・加藤（2004）は Bartholomew & Horowitz(1991)が作成した愛着スタイル尺度の日本語版を作成し、成人の愛着スタイルは安定型・拒絶型・とらわれ型・恐れ型の 4 タイプに分類できると述べている。その中でも拒絶型は「ポジティブな自己観を持ち、他者は信頼できないか拒否的であるというネガティブな他者観を持つ」（田沢 2017: 6）タイプであると説明している。田沢（2017）の研究によると、一般他者への愛着スタイルと恋人に対する依存度には関連があることが明らかになり、「拒絶型」が 4 タイプの中で最も恋人への依存度が低いという結果がみられた。この田沢（2017）の研究結果は、「自己を認識している感覚がある人ほど恋人がいない、もしくは恋人を欲しいと思わない」という本研究の結果と類似している。恋人がいない状況でもはっきりとアイデンティティを確立できてしまっている故に、他者を必要とせず、恋人を必要に思わないのではないだろうか。

### 3. 本研究の意義

本研究の結果から、現在の若者の恋愛離れに特に影響を与えている要因は対自的同一性の高さ、趣味への出費が多いことによって交際費にかけられる金額が少なくなっていることであることが示された。先行研究では、アイデンティティの感覚が劣っている人ほど恋愛離れしているという結果であったが、現在の若者はアイデンティティの感覚が発達しているほど恋愛離れしているという新たな知見が得られた。また、本研究は社会人を含めた 20 代の若者を対象とした研究であったため、大学生に限らない若者の恋愛離れの要因を明らかにすることができたと考えられる。

### 4. 本研究の問題点・課題

本研究の問題点・課題は、2 点挙げられる。1 点目は、回答者の偏りである。男女比が男

性 28 名、女性 105 名と、かなり女性に偏ってしまった。また、研究者の周囲のみでデータ収集を行ったため、この結果を全国の若者に一般化することはできない。男女比に偏りがなく、より代表性の高いサンプルで、再度検討することが重要である。2 点目は、本研究は「アイデンティティ発達」「社会的閉塞感」「消費行動」という先行研究で恋愛離れとの関連が示された 3 要因の中で何が一番影響を与えているかを明らかにしたに過ぎないという点である。著者の知る限りでは、現在恋愛離れを予測する要因であると明らかになっているのはアイデンティティ発達・社会的閉塞感・消費行動の 3 要因であったが、他にも明らかになっている要因が存在する可能性がある。また、現在明らかになってはいないが、恋愛離れを有意に予測すると思われる要因が他にもあるかもしれない。本研究は、あくまで現在明らかになっている著者の知り得る 3 要因の中で何が恋愛離れに影響を与えているのかを明らかにしたに過ぎないということが留意すべき点である。

#### 5. 今後の検討課題

本研究で、アイデンティティ発達に関して先行研究と相反する結果が得られたため、若者のアイデンティティ感覚について再度調査を行っていく必要がある。本研究では分析することができなかった、社会人と大学生のアイデンティティ感覚の差を検証していくべきだ。また、本研究において分析した 3 要因の他にも、未だ恋愛離れとの関連が明らかになっていない要因は存在するだろう。特に、本研究の「自己を認識している感覚がある人ほど恋人がいない、もしくは恋人を欲しいと思わない」という結果と愛着スタイルの「拒絶型」に類似性がみられたため、愛着スタイルと恋愛離れの間に関連がみられるかどうかを今後検証していく必要がある。

【参考文献】

- 大越愛子, 2001, 「恋愛三位一体幻想」大越愛子・堀田美保編『現代文化スタディーズ』晃洋書房, pp.106-121.
- 大森美佐, 2014, 「若者たちにとって『恋愛』とは何か-フォーカス・グループディスカッションによる分析から-」『家族研究年報』39(0), pp.109-127.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニビノ, 2012, 「日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み」『パーソナリティ研究』21 (1), pp.40-52.
- 木谷智子・岡本祐子, 2015, 「青年期における多元的な自己とアイデンティティ形成に関する研究の動向と展望」『広島大学大学院教育学研究紀要第三部』64, pp.113-119.
- 高坂康雅, 2011, 「“恋人を欲しいと思わない青年”の心理的特徴の検討」『青年心理学研究』23, pp.147-158.
- 高坂康雅, 2013, 「青年期における“恋人を欲しいと思わない”理由と自我発達との関連」『発達心理学研究』24(3), pp.284-294.
- 白井利明, 1994, 「時間的展望尺度の作成に関する研究」『心理学研究』65(1), pp.54-60.
- 田沢晶子, 2017, 「大学生の恋愛観と愛着スタイルの関連-恋人に対する依存のしやすさと一般他者を想定した愛着スタイル-」『甲南女子大学研究紀要人間科学編』53, pp.1-7.
- 谷冬彦, 2001, 「青年期における同一性の感覚の構造-多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成-」『教育心理学研究』49, pp.265-273.
- 谷本奈穂・渡邊大輔, 2016, 「ロマンティック・ラブ・イデオロギー再考-恋愛研究の視点から-」『数理社会学会 理論と方法』31(1), pp. 55-69.
- 中尾達馬・加藤和生, 2004, 「成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み」『心理学研究』75(2), pp.154-159.
- 西村智, 2014, 「未婚者の恋愛行動分析-なぜ適当な相手にめぐり会わないのか」『経済学論究』68(3), pp.493-515.
- 畑野快, 2010, 「アイデンティティ形成プロセスについての一考察-自己決定を指標として-」『発達人間学論叢』13, pp.31-38.
- 南学, 2014, 「青年の『恋愛離れ』における社会的閉塞感の影響」『三重大学教育学部研究紀要』65, pp.207-213.
- 箕浦有希久・成田健一, 2013 「2項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討」『感情心理学研究』21(1), pp.37-45.



森岡正博, 2011, 「『草食系男子』の現象学的考察」『The Review of Life Studies』1, pp.13-28.

山田昌弘, 2009, 『なぜ若者は保守化するのか：反転する現実と願望』東洋経済新報社.

湯沢雍彦, 2014, 『データで読む平成期の家族問題－四半世紀で昭和とどう変わったか－』朝日新聞出版.

渡辺裕子, 2010, 「大学生における現代的恋愛の諸相（Ⅱ）：1990年代調査との比較」『駿河台大学論叢』41, pp.105-129.

Bartholomew, K., & Horowitz, L.M, 1991, “Attachment Style among young adults; a test of a four category models.” *Journal of Personality and Social Psychology* 61, pp.226-244.

国立社会保障・人口問題研究所, 2005, 第13回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要」

([http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou13\\_s/doukou13\\_s.asp](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou13_s/doukou13_s.asp)) 2017.07.10 閲覧.

国立社会保障・人口問題研究所, 2010, 第14回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要」

([http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14\\_s/doukou14\\_s.asp](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.asp)) 2017.07.10 閲覧.

国立社会保障・人口問題研究所, 2015, 第15回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要」

([http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15\\_report3.pdf](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_report3.pdf)) 2017.07.10 閲覧.

【付録】 質問紙

**若者の恋愛関係に関する社会心理学調査**

この調査は、若者の恋愛関係に関するものです。

調査はいくつかのセクションに分かれており、交際状況の調査や、アイデンティティ形成、消費行動に関する調査などが含まれています。具体的な調査内容や回答の仕方については、それぞれの問いの冒頭で説明いたします。説明をよく読み、それに続く質問に回答して下さい。

本調査にはみなさまの現在の恋愛関係と過去の交際経験についての質問が含まれていますが、全て匿名で行われます。お名前を書いていただく必要はありません。もしどうしても答えたくない項目がある場合には、その項目は回答せずに、次の項目へ進んでいただいて結構です。**ただし、どの程度正確な情報が集められるかで本調査の成否が左右されますので、できる限り率直に、あなたの考えや経験をお答えいただけるようお願いいたします。**

また、あなたの回答は全て統計的に処理され、調査で集められた全ての回答データには厳重なパスワードがかけられ、保管されます。そのため、あなた自身やあなたの回答が誰かに特定されることはありません。

それぞれの質問には、正しい答えや誤った答えはありません。あなた自身がどのように考えるかを率直にお答え下さい。

同じような質問が繰り返されていると感じる場合があるかもしれませんが、どれも必要かつ重要な質問です。それぞれの文章をよく読み、回答して下さい。

上記の内容に同意していただけたら、次のページにお進み下さい。

ご質問等ございましたら、こちらまでご連絡お願い致します。

鬼頭ゼミ 谷口陽

連絡先: [14sg1169@meijigakuin.ac.jp](mailto:14sg1169@meijigakuin.ac.jp)

Q1.あなたの現在の交際状況を教えてください。(当てはまるものを1つ選んで下さい)

- a) 結婚している
- b) 婚約している
- c) 恋人がいる
- d) 恋人はいないが恋人が欲しいと思っている
- e) 恋人がおらず恋人が欲しいとも思わない

Q2.過去の交際人数を教えてください。(現在、交際相手や婚約者、配偶者のいる方は、その方を含めた人数をお答えください。)

- a) 0人
- b) 1～2人
- c) 3～5人
- d) 5人以上

Q3.以下のそれぞれの項目が、普段のあなたの考えや気持ちにどの程度当てはまるのかについて、最も当てはまる数字を一つ選んでください。

	全く当てはまらない	当てはまらない	あまり当てはまらない	少し当てはまる	当てはまる	非常に当てはまる
1.過去において自分をなくしてしまったように感じる	1	2	3	4	5	6
2. いつのまにか自分が自分でなくなってしまった	1	2	3	4	5	6
3. 今のままでは次第に自分を失っていつてしまうような気がする	1	2	3	4	5	6
4. 自分が望んでいることがはっきりしている	1	2	3	4	5	6
5. 過去に自分自身を置き去りにしてきたような気がする	1	2	3	4	5	6

6. 人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる	1	2	3	4	5	6
7. 自分の本当の能力を活かせる場所が社会にはないような気がする	1	2	3	4	5	6
8. 現実の社会の中で、自分らしい生活が送れる自信がある	1	2	3	4	5	6
9. 人前での自分は、本当の自分ではないような気がする	1	2	3	4	5	6
10. 「自分がない」と感じることもある	1	2	3	4	5	6
11.自分が何をしたいのかよくわからないと感じるときがある	1	2	3	4	5	6
12.自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う	1	2	3	4	5	6
13.自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う	1	2	3	4	5	6
14.本当の自分は人には理解されないだろう	1	2	3	4	5	6
15.自分がどうなりたいのかはっきりしている	1	2	3	4	5	6
16.自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある	1	2	3	4	5	6
17.現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う	1	2	3	4	5	6
18. 自分のすべきことがはっきりしている	1	2	3	4	5	6
19.自分は周囲の人々によく理解されていると感じる	1	2	3	4	5	6
20. 現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う	1	2	3	4	5	6

Q4. 以下のそれぞれの項目が、普段のあなたの考えや気持ちにどの程度当てはまるのかについて、最も当てはまる数字を一つ選んでください。

	全く当てはまらない	当てはまらない	あまり当てはまらない	少し当てはまる	当てはまる	非常に当てはまる
1. 毎日がなんとなく過ぎていく	1	2	3	4	5	6
2. 毎日の生活が充実している	1	2	3	4	5	6
3. 私は過去の出来事にこだわっている	1	2	3	4	5	6
4. 毎日が同じことの繰り返しで退屈だ	1	2	3	4	5	6
5. 私には未来がないような気がする	1	2	3	4	5	6
6. 今の自分は本当の自分ではないような気がする	1	2	3	4	5	6
7. 将来のためを考えて今から準備していることがある	1	2	3	4	5	6
8. 私には将来の目標がある	1	2	3	4	5	6
9. 今の生活に満足している	1	2	3	4	5	6
10. 私の過去は辛いことばかりだった	1	2	3	4	5	6
11. 私の将来には希望がもてる	1	2	3	4	5	6
12. 私にはだいたいの将来計画がある.	1	2	3	4	5	6
13. 将来のことはあまり考えたくない	1	2	3	4	5	6
14. 私は自分の過去を受け入れることができる	1	2	3	4	5	6
15. 過去のことはあまり思い出したくない	1	2	3	4	5	6
16. 私の将来は漠然としていてつかみどころがない	1	2	3	4	5	6
17. 自分の将来は自分でできりひらく自信がある.	1	2	3	4	5	6
18. 10年後、私はどうなっているのかよくわからない	1	2	3	4	5	6

Q5.以下のそれぞれの項目に1ヶ月あたりいくら使っているか1つ選んで回答してください。(正確に分からない場合、大体でかまいません)。

1.勉強用の本

a.～5,000円 b.5,001～10,000円 c.10,001～20,000円 d.20,001～30,000円  
e.30,001～40,000円 f.40,001～50,000円 g.50,001円以上

2.娯楽用の本・雑誌

a.～5,000円 b.5,001～10,000円 c.10,001～20,000円 d.20,001～30,000円  
e.30,001～40,000円 f.40,001～50,000円 g.50,001円以上

3.生活費・貯金

a.～5,000円 b.5,001～10,000円 c.10,001～20,000円 d.20,001～30,000円  
e.30,001～40,000円 f.40,001～50,000円 g.50,001円以上

4.交際費

a.～5,000円 b.5,001～10,000円 c.10,001～20,000円 d.20,001～30,000円  
e.30,001～40,000円 f.40,001～50,000円 g.50,001円以上

5.服飾費

a.～5,000円 b.5,001～10,000円 c.10,001～20,000円 d.20,001～30,000円  
e.30,001～40,000円 f.40,001～50,000円 g.50,001円以上

6.趣味

a.～5,000円 b.5,001～10,000円 c.10,001～20,000円 d.20,001～30,000円  
e.30,001～40,000円 f.40,001～50,000円 g.50,001円以上

7.通信機器の料金

a.～5,000円 b.5,001～10,000円 c.10,001～20,000円 d.20,001～30,000円  
e.30,001～40,000円 f.40,001～50,000円 g.50,001円以上

Q6.あなたの普通自動車免許の取得状況について、当てはまるものを1つ選択してください。

1.免許を取得している 2.免許を現在取得中 3.免許を持っていない

Q7.あなたが現在利用できる車について、当てはまものを1つ選択してください。

- 1.自分専用の車がある 2.家族やルームメイトと兼用の車がある 3.利用できる車はない

Q8. 次のそれぞれの項目が、あなた自身にどの程度当てはまるのかをお答えください。(各質問についてもっとも適切な数字を1つ選んでください)。

	全く当てはまらない	当てはまらない	あまり当てはまらない	少し当てはまる	当てはまる	非常に当てはまる
1. しっかりしていて、自分に厳しいと思う	1	2	3	4	5	6
2. 人に気をつかう、やさしい人間だと思う	1	2	3	4	5	6
3. 新しいことが好きで、変わった考えをもつと思う	1	2	3	4	5	6
4. ひかえめで、おとなしいと思う	1	2	3	4	5	6
5. 自分にはいろいろな良い素質があると思う	1	2	3	4	5	6
6. 心配性で、うろたえやすいと思う	1	2	3	4	5	6
7. 活発で、外向的だと思う	1	2	3	4	5	6
8. 他人に不満を持ち、もめごとを起こしやすいと思う	1	2	3	4	5	6
9. 自分のことを好ましく感じる	1	2	3	4	5	6
10. 発想力に欠けた、平凡な人間だと思う	1	2	3	4	5	6
11. 冷静で、気分が安定していると思う	1	2	3	4	5	6
12. だらしなく、うっかりしていると思う	1	2	3	4	5	6

Q9.以下のそれぞれの項目について、あなた自身に当てはまるものを1つ選んで回答してください。

1. 全体的にみて、あなたは自分自身が恋人としてどの程度魅力的だと思いますか？					
1	2	3	4	5	6
非常に 魅力的でない					非常に 魅力的
2. 全体的にみて、異性はあなたのことをどの程度恋人として魅力的だと評価すると思いますか？					
1	2	3	4	5	6
非常に 魅力的でない					非常に 魅力的
3. 全体的にみて、他者と比べた時に、あなたは自分自身が恋人としてどの程度魅力的だと思いますか？					
1	2	3	4	5	6
平均より 非常に 低い	平均より 低い	平均より 少し 低い	平均より 少し 高い	平均より 高い	平均より 非常に 高い
4. 全体的にみて、あなたはどの程度他者の目に留まると思いますか？					
1	2	3	4	5	6
全く 目に 留まらない	目に 留まら ない	あまり 目に 留まらない	すこし 目に 留まる	目に 留まる	非常に 目に 留まる

最後に、あなた自身について以下の質問に回答して下さい。

1) 性別

男性    女性    その他

2) 年齢

18～27 歳までの各数字、28 歳以上の選択肢を設けて選択式にした。



3) 居住形態

1. 一人暮らし 2. 実家暮らし 3. ルームメイトと 4. 寮・下宿で共同生活 5. その他

4) 出身地： \_\_\_\_\_ 都・道・府・県

この調査に関して

この調査・質問紙に関してご意見、ご感想があればご自由にお書きください。

質問は以上です。

ご協力ありがとうございました。